

平成 16 年度幼児読書講演会要旨

絵本の楽しみ



正高 素子 氏（絵本作家）

（東濃会場の様子）

今、子育てをしている人は初心者が多く、たいていは核家族で若い母親が一人で育てています。これは人類始まって以来の事態です。人間は自給自足の生活を送り、ずっと大家族で暮らしてきました。子どもの母親は生活のために労働し、子育ては労働の第一線から退いた、経験豊かな祖父母がやり、兄や姉などが子守りをしました。そんな暮らしがここ数十年で激変し、子育ての経験のない若いお母さんが、宇宙人のような赤ちゃんを一人で育てなくてはならなくなりました。

『人はなぜ子育てに悩むのか』（正高信男著、講談社現代新書）にあるように、夫が無理解であったり祖父母の助けが得られない孤立無援の状態にもかかわらず、子育てはうまくやらなくてはいけないというプレッシャーがあり、お母さんたちは育児不安に陥ってしまいます。子育てについての親の心構えを考えたとき、『より道わき道散歩道』（河合隼雄著、創元社）の中に、甘えについてのエッセイがあります（「甘え」の大切さ）。甘えることができなければ自立できない、親の過干渉と子どもの甘えを間違えてはいけない、家族の中にこそ甘えが必要、といったことが書かれていますが、全くそのとおりだと思います。

人間の心の成長は自分は愛されているという安心感がベースにあると思います。子どもを一粒の種だとしたら、安心感の水です。種は水を与えられて、初めて自分を大切にしている心＝根っこを地面にはるすることができます。そして自分を大切にしている心があれば、他人に共感できる力や困難にのぞむ意欲、やさしさやがんばり＝茎や葉が育っていきます。日の光を受けて自立＝花や実をつけることができます。安心感抜きに心の成長はありえません。

しかし、豊かな現代において、子どもに愛を伝えることは案外難しいことです。生活が豊かになって愛が見えにくくなっています。親はこれだけしているのだから、子どもは愛に気づいてくれるはず、とっと思っていても、子どもにすれば、全て当たり前のことで、いちいち親の愛情を感じてくれません。

ではどうすればよいかというと、ぜひ絵本を読んでください。絵本を読んだときには必ず愛情が伝わります。これほど簡単に確実に愛が伝わる方法はありません。そこには、その人の肉声があり、ぬくもりがあり、親子のよいコミュニケーションにつながります。特に寝る前の時間を読み聞かせの時間として習慣づけることが大切です。寝る前がよいのは、親に怒られてばかりの子どもも、一日を平和に締めくくることができ、気分良く、安心して眠りにつくことができるからです。ぐっすり眠ることは子どもの体の成長にとってもよいことです。そして次の日も機嫌良く一日を始めることができます。習慣にする理由は、子育て中は非常に忙しく「ひまになったら読む」と約束しても、ひまにならないからです。

よくできた絵本のテキストの多くは、子どもたちが大好きな 4 拍子のリズムにあわせて書かれています。特に 2 歳くらいまでの小さな子どもは、絵本を読むと言うより絵本で遊び、絵本に親しむ時期です。リズムに乗せてわらべうたをうたうようなかんじで読むと子

どもたちはとても喜びます。絵本は遊ぶものにとらえて絵本をもとに存分に遊んで楽しむとよいでしょう。

幼稚園や保育所に通う頃になると、ストーリー性のある絵本を喜ぶようになります。ナンセンス絵本も積極的に読むとよいでしょう。笑いは子どもを救います。幼稚園や保育所で仲間にいじめられたり、家で親に叱られたり、子どもたちは辛い思いをしています。しかし、絵本の中で大笑いすると、不思議とそのことが忘れられます。ナンセンス絵本は、大人には「意味がない、笑えるだけ」と嫌われるタイプの絵本ですが、子どもにとっては「笑える」というところに大きな意味があります。

また、子どもにはお話の主人公になりきる能力があります。主人公になってお話を読む子どもにとって、ハッピーエンドで終わるお話は、大きな安心感を得られます。特にハッピーエンドのお話でおすすめるのは昔話です。昔話は、長い年月を経て口伝えで伝えられてきたもので、ドラマチックで子どもにくっきりとした印象を残します。ぜひ昔話絵本を読んでやりたいところですが、再話も挿絵もいろいろな人が手がけていて同じ昔話でもたくさんの種類の絵本があり、どれがよいのか困ってしまいます。そんなときは、オリジナルのお話に忠実なものをしっかり選んでください。『おおかみと7ひきのこやぎ』や『三びきのこぶた』など、最後の残酷なシーンを省いてしまったり、変えているものも多く見られますが、食うか食われるかの世界で主人公になりきっている子どもたちにとっては、それではハッピーエンドになりません。

昔話の残酷な場面からは、命の大切さを伝えられると思います。生きているものはみな残酷で、自分の命は多くの命の犠牲の上にあること、だからこそ自分の命を大切にしないといけないことが、幼い子どもにもよく伝わります。残酷な場面は、子どもたちを怖がらせるような具体的な描写はしていないので、子どもたちも抽象的に受け止めます。残酷な場面を読むと、子どもは真似をして同じような残酷なことをするのではないかと大人は心配しがちですが、それは逆で、自分の残酷性を自覚することが残酷性を克服する第一歩だと思います。自信を持ってオリジナルに忠実な絵本を選んでください。

しかし、子どもたちは、テレビのヒーローものが大好きで、それらの絵本版が大好きです。現実の世界では弱くてもみじめな存在であることを強く意識しているからこそ、空想の世界でヒーローになることでプライドを守り、現実世界との帳尻をあわせているのではないかと思います。子どもの好みを無視したりけなしたりするのではなく、こういった世界にも理解を示しつつ、親子の絆を深めてください。しかし、テレビのヒーローものの絵本ばかり読んでいると、お母さんが読むのがいやになってしまいます。読み聞かせはお母さんが楽しまなければ続きません。お母さんが楽しむことが第一です。お母さんがせつせと自分がおもしろいと思うものを読んでいれば、子どももだんだん興味をうつしてきます。読み聞かせをとおして、親にもよいことがあります。昼間は暴れまわっていて手におえないような子どもが、夜になれば、かわいらしい、やさしいお話の絵本を「読んで」とせがんでくると、その子の中にやさしさの育ちを見てとることができ、安心できます。親子が一つの世界を共有することで、子どもとの信頼関係を作っていくことができます。肉声で肌のぬくもりをとおして親の愛を伝えてください。

<岐阜会場>4月23日(金)岐阜県図書館にて。150名参加。

<東濃会場>4月28日(水)瑞浪市総合文化センターにて。80名参加。

4月、5月の行事報告

お父さんお母さんのための絵本講座（会場：岐阜県図書館）

4月15日（木）11：00～11：30

4月18日（日）14：00～14：30

幼児期における読み聞かせの大切さを知っていただき、保護者および子どもの家族が家庭で読み聞かせをするきっかけとなるよう、絵本講座を開催しました。当館職員が絵本の読み聞かせをまじえながら、絵本の選び方や読み方を説明しました。

図書館員と読み聞かせボランティアのための絵本講座（会場：岐阜県図書館）

5月19日（水）10：30～15：30

参加者：79名

2001年に子どもの読書活動の推進に関する法律が施行されて以降、子どもの読書への関心が一段と高まり、絵本の読み聞かせ活動が地域や学校で広がっています。こうした活動を支援するため、今年度も図書館員や読み聞かせボランティアの皆さんを対象とした、絵本に関する基本的事項についての講座を開催しました。予想をはるかに上まわる応募があり、読み聞かせへの関心の高さを伺うことができました。

講師は当館職員（児童図書館員養成講座修了者）が担当し、午前中は読み聞かせの方法や絵本の選び方などについての基本事項を確認し、午後からはグループに別れ、当館児童図書研究室の読みくらべ絵本を活用し、実際に読み聞かせをするにあたって絵本を選ぶ実習を行いました。読み聞かせの対象年齢を決めるところから始め、たくさんの読みくらべ絵本の中から読み聞かせに適した絵本を選択し、その根拠や絵本の特徴について発表をしていただきました。同じ題名・内容の絵本でも、絵や言葉づかい、レイアウト等の違いにより受ける印象がまったく異なることを改めて知っていただけたようです。



【講座に寄せられたアンケートより】

- ・ 同じお話を違う絵本で読み比べる機会がなかったので少々疲れたが参考になった。
- ・ 一つの物語でこんなにも違いがあるとは思わなかった